

# 第1回目（1993年9月18日放送）

## 【いろはがるた】

※音飛びのためなし

## 【話の内容】

20年近く前に、豊平走川氏(とよひらそうせん・「日布時事」の記者)から大久保へ送られて来た手紙の紹介。ママさん<sup>1</sup>たちの影の活躍が、今日のハワイ日系社会の発展を支えた。このママさんたちは、写真花嫁としてハワイにやってきた。豊平氏によるこの日本人女性たちに関する原稿をもとに大久保が語る。

写真花嫁は、1908年(明治41年)から1924(大正13年)年7月31日まで16年間続いた呼び寄せ時代にハワイに来た。ハワイ在住の日本人男性が郷里に自分の写真を送り、仲人に世話をされた女性が自分の写真を送り返す。女性は男性との入籍の手続きを日本で済ませ、ハワイから送られた旅費で、妻としてハワイへ渡った。呼び寄せ時代には、呼び寄せ花嫁のほかに呼び寄せ少年・娘(日本に残されていた移民の子どもたち)もいた。豊平も呼び寄せ少年であり、17歳の時にハワイに渡った。乗っていた東洋汽船の紀洋丸の三等船室には、各県からの写真花嫁でいっぱいであった。彼女たちは、夕方になると、デッキの隅に肩を寄せ合って集まり、当時日本で流行っていた「ああ世は夢か幻か<sup>2</sup>」や「青葉茂れる桜井の」を歌っていた。

写真花嫁たちはハワイに上陸すると、移民局で集団結婚式を挙げ、初めて見る夫に連れられプランテーションに向かった。結婚の余韻もないうちに、日々の仕事に追われ、子育てをし、家族のために働いた。

写真結婚に使われた写真は、本人と似ても似つかないものが多かった。顔を見てもわからないので、移民局で自分の名札を付けた行李を手にとった男の人を自分の夫だと認識した。「頼母子落としてワヒネ<sup>3</sup>を呼んで、人にとられてベソをかく」(頼母子が落とせたので、やっと日本から妻を呼び寄せたが、妻を人にとられて落ち込んだ)というホレホレ節のように、結婚を嫌がった女性がほかの男性と逃げる事例も多少はあったが、ほとんどの女性が「来たからには頑張らねば！」と腹を括って踏ん張った。我慢や忍耐で生き抜いてきた写真花嫁だったが、日本での嫁入りとは違い、姑や舅がいなかったのは唯一の救いだったかもしれない。

政策結婚、生活結婚があったが、頑張ってくれた1世がいたおかげで今がある。

---

<sup>1</sup>日本語由来のピジン語でお母さん・おばさんの意。

<sup>2</sup>「夜半の追憶(男三郎の歌)」のこと。美しき天然のメロディーに合わせて、死刑囚野口男三郎をイメージした詞をあてた替え歌。

<sup>3</sup>Wahine. ハワイ語で女性・妻の意。

**【曲】**

「青葉茂れる桜井の」(歌:東京混声合唱団・女声合唱団)

**【サブジェクトタグ】**

呼び寄せ移民 写真花嫁 日布時事